5　発掘調査の成果

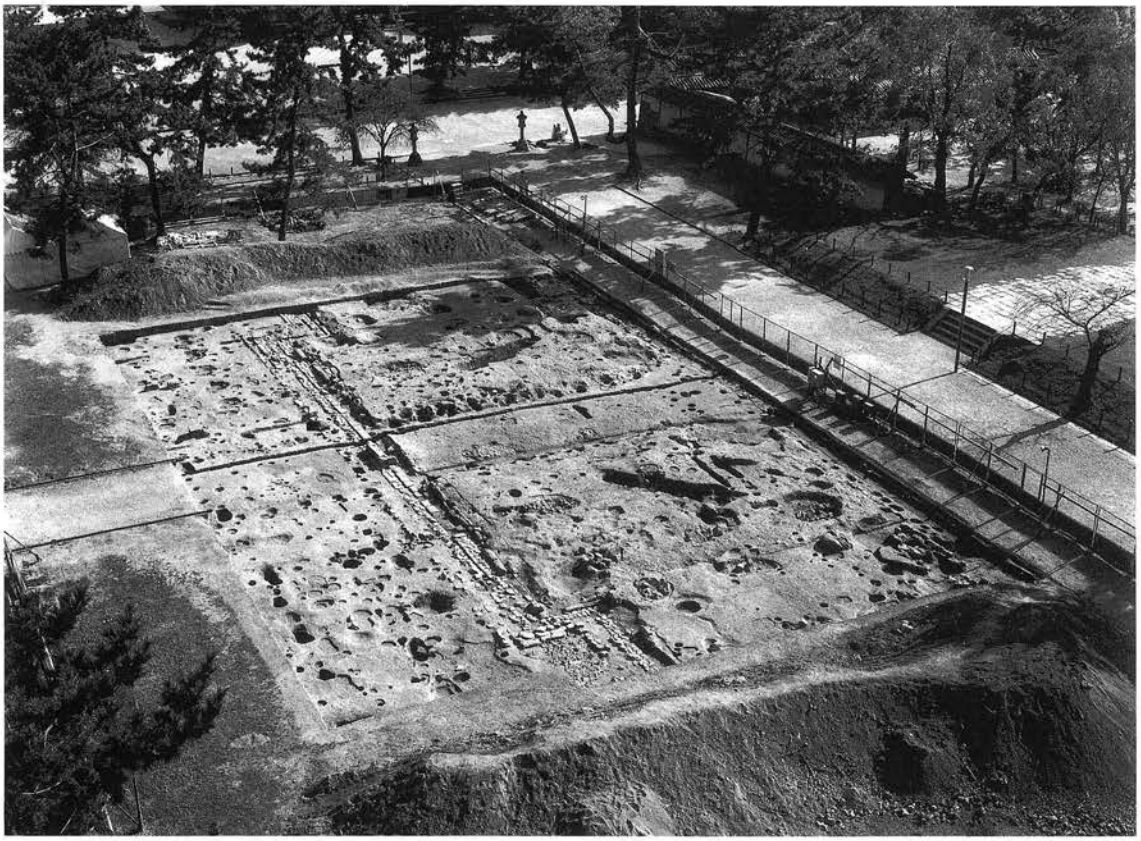
(1)　建物・基壇上の遺構

中門の遺構面は、最も遺存の良好な棟通りの東西部分において、現地表下約５㎝で基壇土に達する。しかしながら中央間に相当する部分では東西約６ｍ幅で参道敷設による削平を受けており、近世以降の松の植樹による攪乱も少なからず存在するため、基壇の残りは必ずしも良好であるとはいえない。

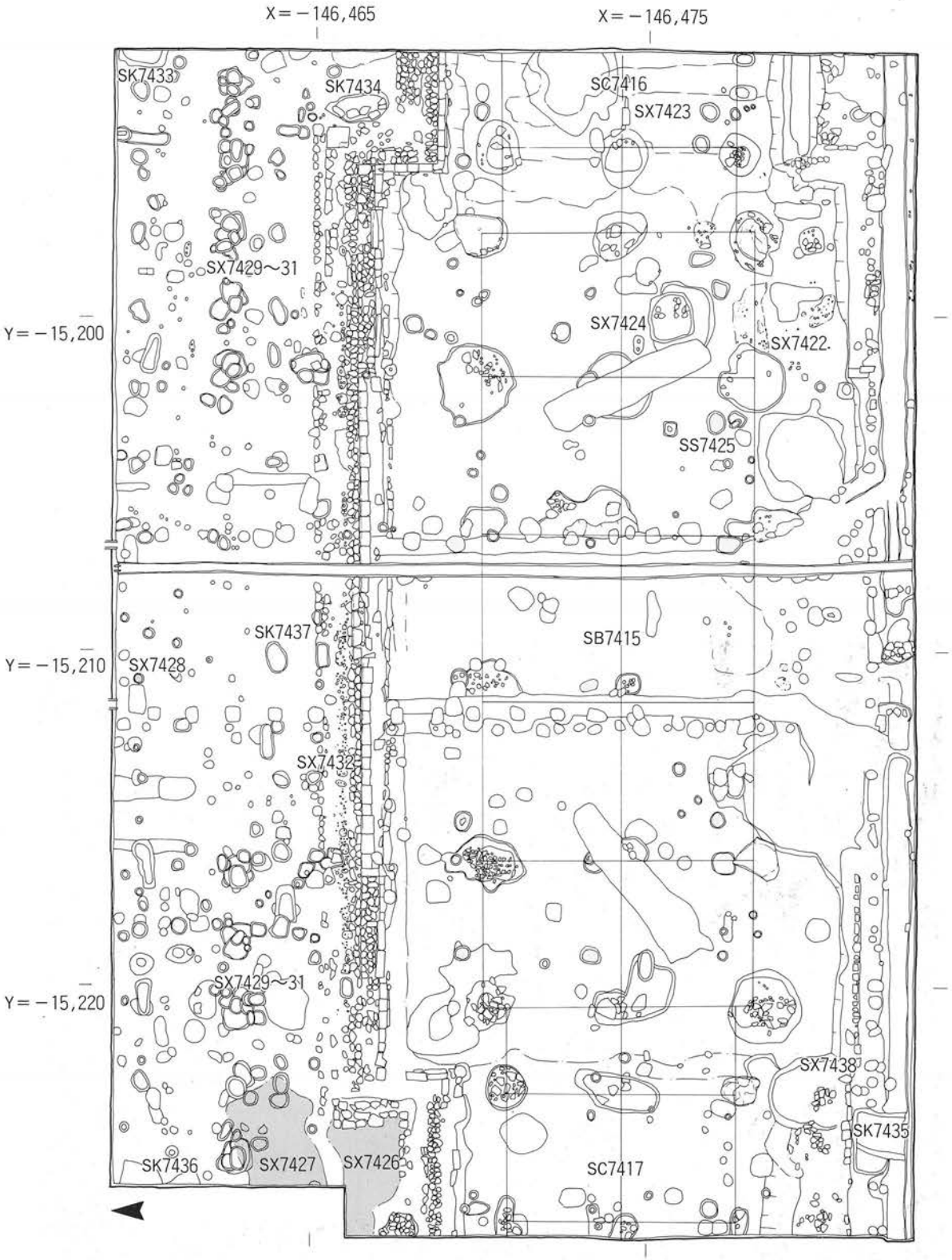
参道東辺の電線埋設溝およびトレンチ調査の結果、中門地区の旧地形は、調査区東半で東南に向かう谷がはいっており、調査区南端中央、階段付近で現地表面から約90㎝下、同東端の回廊北側通り付近で110㎝下において、旧表土面を確認した。この谷を地山の切土により埋め立て、整地の後、基壇築成をおこなっている。参道西辺がおおむね傾斜の変換点になっており、基壇西半の基底部は地山を削り出して形成する。中門と回廊の境には、帯状にバラス混じりの土をおいている。

中門SB7415　最も遺存の良好な中門基壇上面の標高は、95.20～95.30ｍで、北階段地覆石上面との比高差約0.4ｍ、調査区南端で検出した焼土面との比高差は約0.6ｍである。礎石はいずれも花崗岩で、基壇上に３基が遺存し、他の15基はすべて抜き取られるか、破砕されている。現存する礎石の大きさは上面で約1.2×1.2ｍをはかる。径30～40㎝の河原石を根石とし、その上に直接据えつける（第10図１）。抜き取り穴の基底部にも根石の遺存を確認した。

基壇最上面では、多量のバラス・焼土・土器・瓦を含む積みなおし基壇土が認められた。14世紀代の土器が含まれることから、応永の再建にともなうものであろう。東南端間の南側通りの柱間では、その



第８図　調査区全景（西北より）



第９図　発掘調査遺構図（１:180）

上面に凝灰岩切石の痕跡が認められた。端間南面の金剛柵地覆石と考えられる（SX7422）。

礎石および抜き取り穴から推定される中門の建物規模は、東西23m（78尺）、南北8.4m（28尺）で、桁行5間、梁行2間に復原できる。柱間の寸尺は、桁行中央3間が16尺等間、両端間が15尺等間、梁行が14尺等間となる。基壇は、その平面規模が東西27m（92尺）、南北14m（48尺）、基壇の出は、平方向が10尺、妻方向が7尺となる。階段の幅は、中央3間分である。

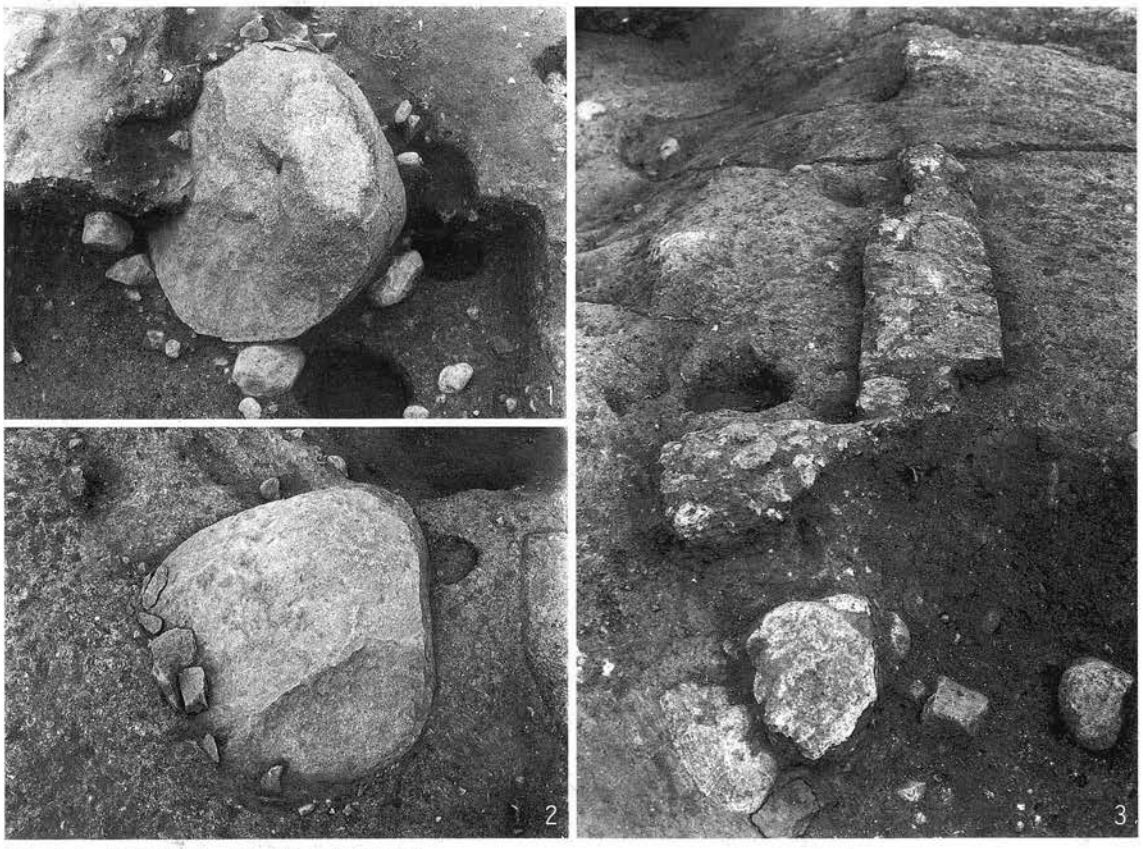
なお、北側柱筋に沿って東西方向にいれたトレンチにおいて、基壇築成土の下層で2基の柱穴を検出した。

南面回廊SC7416・7417　南面回廊基壇上面の標高は、東回廊SC7416で94.9～95.07m、西回廊SC7417で95.07～95.12mである。中門基壇の東西縁に最初の柱を設け中門に取り付く。礎石は花崗岩で、西側基壇取り付き部で1基が遺存し、他は東西合わせて8基の抜き取り穴を確認した。

SC7417では、基壇積土はほとんど遺存していなかったが、SC7416では、基壇土の中に焼土を含む層があり、基壇土自体の積みなおしが観察された。調査区東端で検出した凝灰岩切石による回廊棟通り地覆石SX7423は、この積みなおし土の上面に据えられたものである（第10図3）。

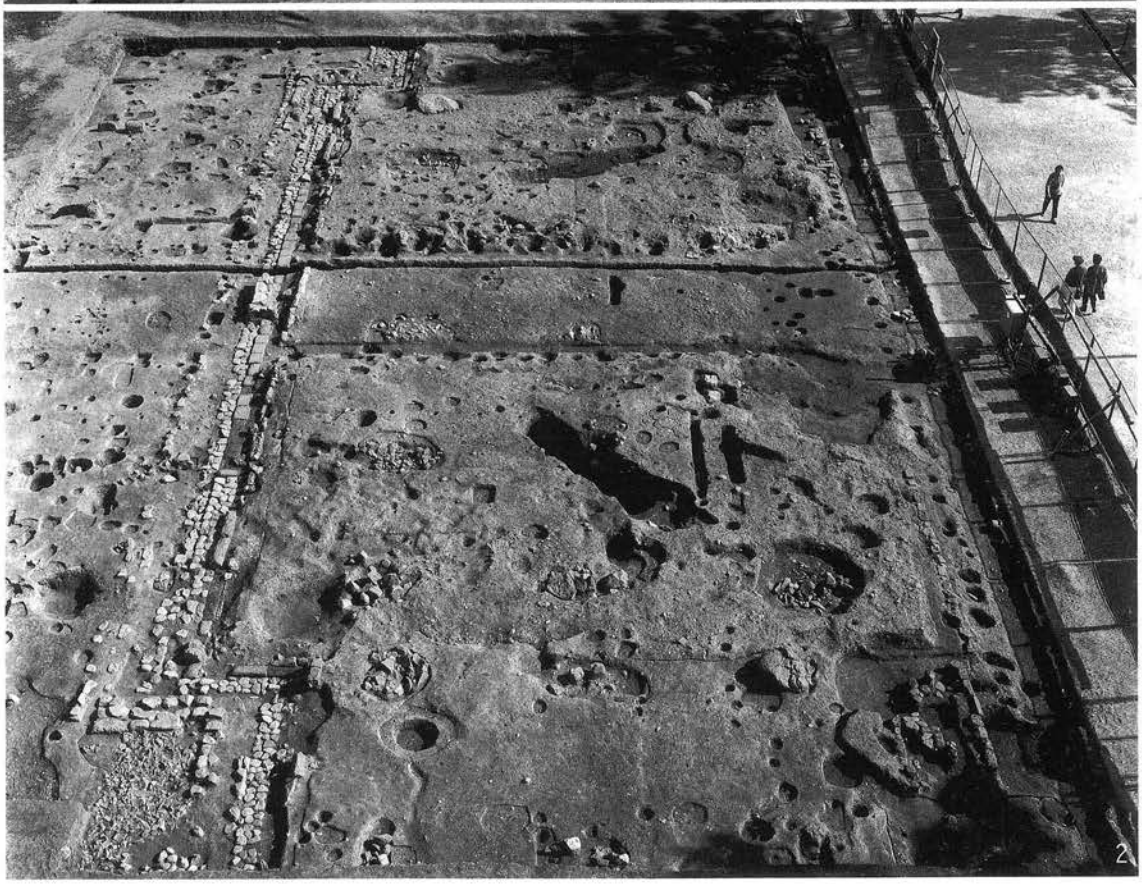
礎石等の位置から推定される回廊の建物規模は、南北7.1m（24尺）、梁行12尺2間等間、中門取り付き部の桁行2.6m（9尺）、SC7417において確認した西の桁行4.1m（14尺）となる。基壇幅は10.6m（36尺）、基壇の出は6尺である。

また、中門および南面回廊基壇上で足場穴と考えられる複数の小柱穴を確認した。足場SS7425は、桁行5間、梁行2間、柱間は約4mで、柱穴のひとつから14世紀後半の瓦質火鉢が出土した。



第10図　中門礎石・回廊棟通り地覆石

1　南東隅礎石　2　北東隅礎石　3　回廊地覆石SX7423（西より、手前は礎石抜き取り穴）



第11図　中門・南面回廊基壇全景
1　東より、奥は南円堂と西金堂跡　2　西より

従鬼（夜叉）像台石SX7424　中門棟通り東から２基目の礎石位置の東南に近接して、表面に円形の穴を２つ穿った花崗岩を、基壇に据え付けられた状態で検出した。上面は平坦で楕円形を呈し、東西（横）60cm、南北（縦）30cm、穴は径11cm、深さ20cm、心々間が27cmで東西方向に並ぶ。東の穴の中からは、銅・鉄製品が出土した。断ち割り調査の結果、この石の高さは28cm、上面よりもやや広めに掘った掘形の南に寄せて石を据え、拳大の石で北側から押さえている（第12図２）。

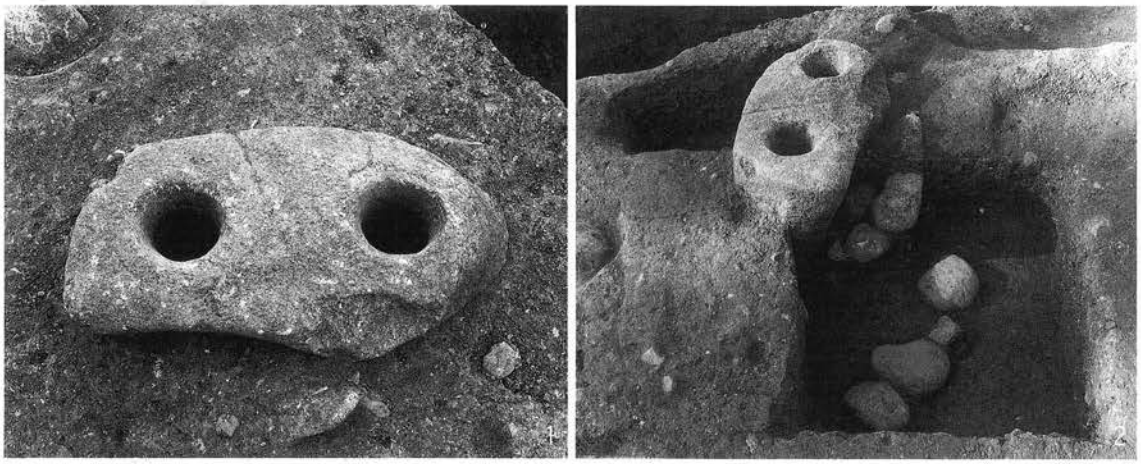
これと同様の穴をもつ石が、基壇西南部で地表に転倒していた。上面は横56cm、縦32cm、高さ28cmで上面には前者と同様に径11cmの円形の穴が２つ、心々間28cmで並ぶ。穴の深さはそれぞれ20cm、22cmである。このように、両者はきわめてよく似たつくりのものである。

興福寺蔵『肝要絵図類聚鈔』に収められた室町時代の大乗院門主尋尊大僧正自筆の古図を写したとされる伽藍古図には、中金堂院の一部について堂間の寸尺と、安置像の配置が記されている（『奈良六大寺大観』第７巻　興福寺１　岩波書店　1969、解説挿図３）。中門は、東西両端間の中央および四隅に小さな円を５つ描き、中央の円には「二天」と示す。

中門の安置像については、『興福寺流記』に、「在四王二軀従鬼八口。宝字記神王二鋪云云。延暦記云。従鬼各四口云云。」とあり、享保２年の火災後に書かれ、それ以前の様子を伝えるとされる『興福寺濫觴記』は、「東持国天　西増長天　八夜叉各立像。各長一丈四寸五尺　各八尺五寸。右各応永年中。春日大仏師成慶造之。」とし、当初から二天像と東西各４体の従鬼（夜叉）像が置かれ、その制が引き続き守られていたことを知ることができる。

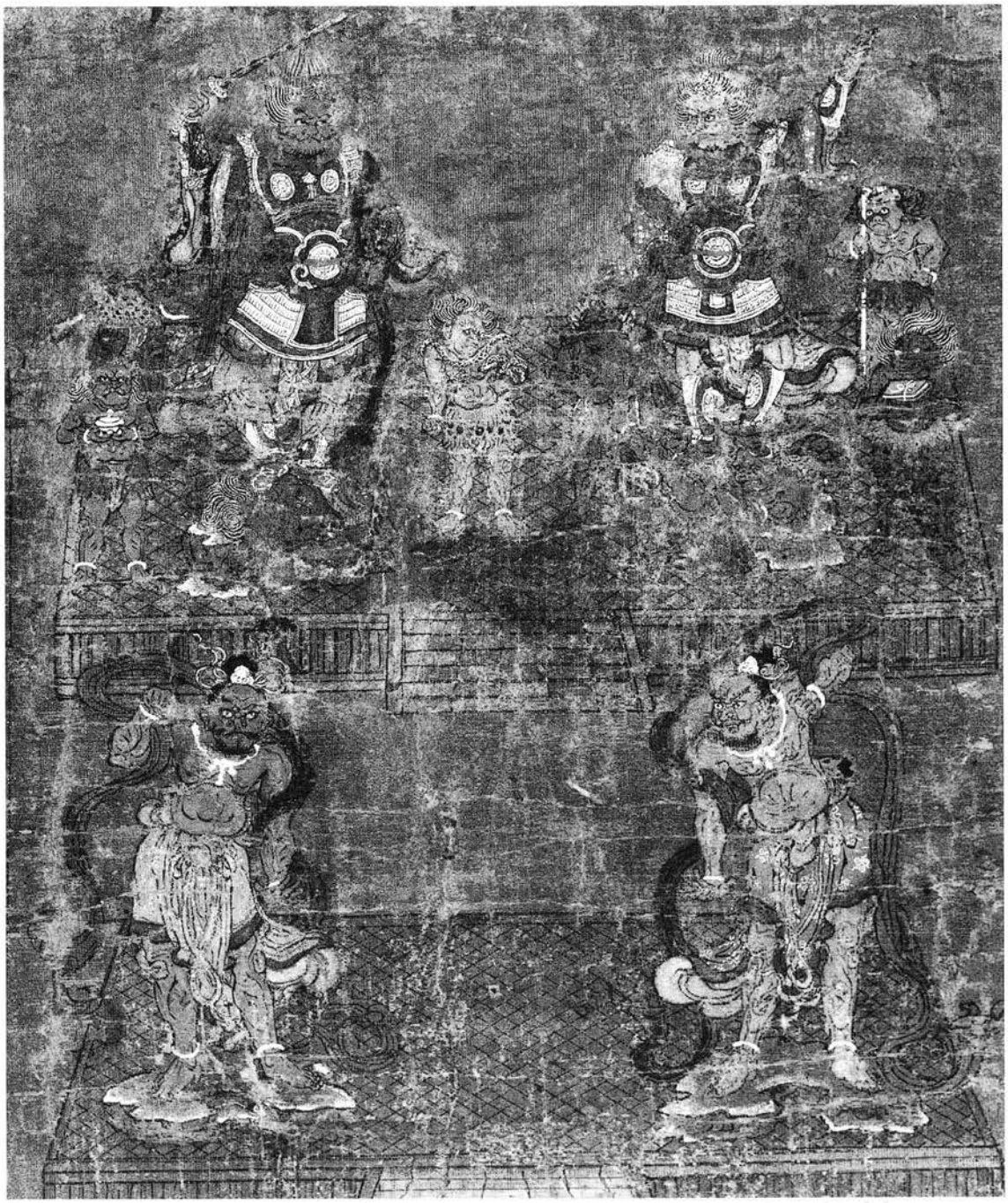
また、治承以前のありかたを基本に描いたとされる京都国立博物館蔵『興福寺曼荼羅図』は、下段中央に中門および南大門を描くが（第13図）、中門の基壇上には、邪鬼を踏みつける二天像と東西に各三体の立像の従鬼がみえる（毛利久「興福寺曼荼羅と同寺安置佛像（上）（下）」『国華』778・780号　1957、京都国立博物館『興福寺曼荼羅図』1995）。

検出位置から、この石は中門に安置された従鬼像の台石のひとつであると考えられる。同様な形制の石が複数みられることもその根拠となろう。台石が像の両足の芯木を受ける穴をもつことから、像は塑像で、台石は奈良時代（創建時）に遡る可能性がある。また、穴の間隔と並びから像は等身大に近く、南面していたものと推定できる。



第12図　従鬼像台石SX7424
１　上面（北より）　２　据え付け状況（東より）

奈良時代の門に安置された像の台石の発掘例としては、薬師寺中門の事例がある。1982年の奈良国立文化財研究所による発掘調査では、桁行5間×梁行2間の中門両端間に2対の仁王像台石が4基確認された（奈良国立文化財研究所『薬師寺発掘調査報告』1987）。これらの石の上面には、それぞれ1つずつ芯木を受ける穴が穿たれており、その中からは、天禄4年（973）に火災で焼失した仁王像のものと思われる塑像片が大量に出土し、この像が塑像であったことを裏づけた。また、奈良時代の門の両端間に安置された塑像の例に、和同4年（711）の法隆寺中門金剛力士像をあげることができる（法隆寺『法隆寺重要文化財塑造金剛力士立像修理工事報告書』1965）。



第13図　『興福寺曼荼羅図』部分（京都国立博物館蔵、飛鳥園撮影）

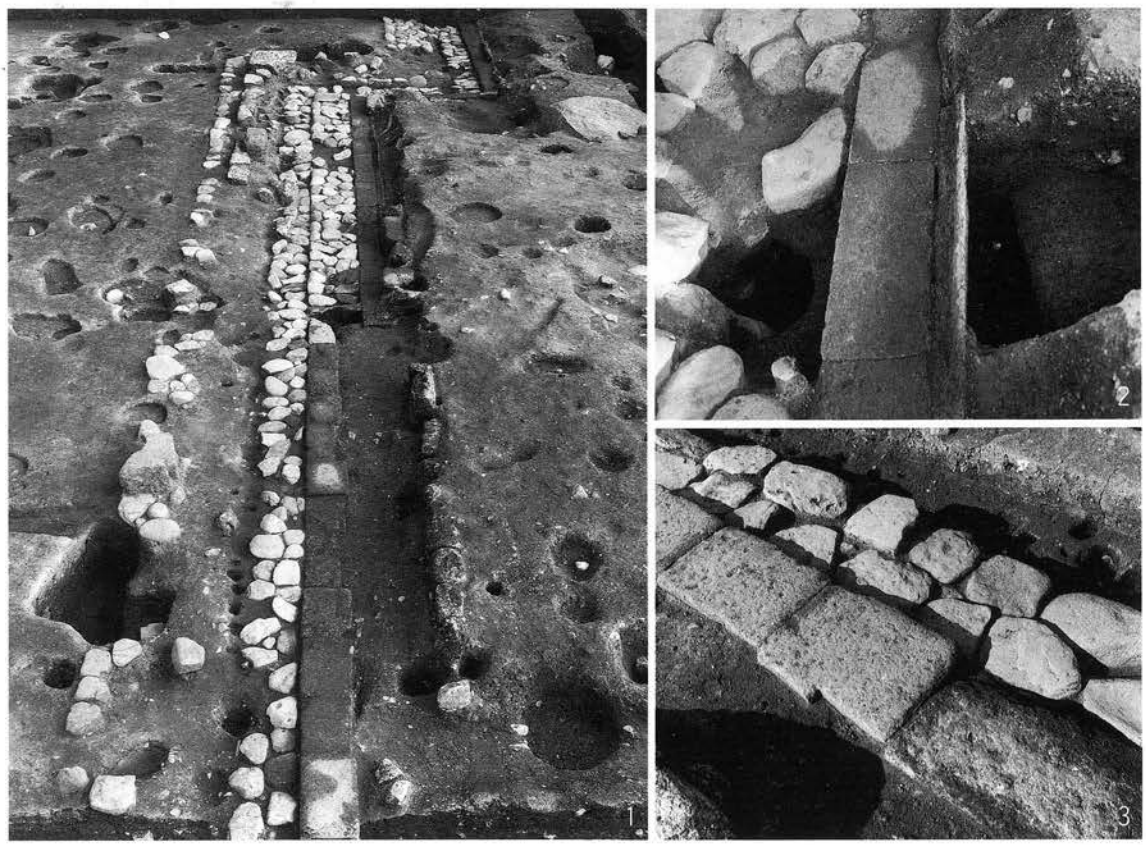
(2) 基壇外周の遺構とその変遷

基壇の外周は、北側の遺存状況はおおむね良好であったが、南側についてはほぼすべての石材が抜き取られていた。なお、北側においても基壇外周に沿って、基壇崩壊土である橙褐色粘質土を埋土とする幅１～1.2ｍの溝が巡っており、その肩に多量の割り石が遺棄されていた。外装石材の抜き取りを示すものである。

基壇外周において、現在確認される最も古い遺構は、凝灰岩切石による壇正積基壇の一部と、これにともなう一連の遺構である。後述するように、この基壇外装は火災後の改修によるものと考えられ、この時期をＢ期とし、それ以前をＡ期として以下に基壇外周の遺構とその変遷を述べる。

Ｂ期　北側の基壇外装にあたる凝灰岩地覆石列と羽目石SX7418がある。地覆石は、長さ40～50cm、幅20cm、厚さ15cm前後の平面長方形のものをもちい、上面に溝等の加工は認められない。この地覆石に厚さ12cmの羽目石をのせる。羽目石の基部には高さ６cm、奥行き６cmの切り欠きがつくられており、これを地覆石の背面・基壇側にあてはめる（第14図２）。

階段は、中央３間分を占め、羽目石から地覆石北端までは、約70cmである。階段部分の羽目石は、基壇土を削り直接据え付けている。この階段の出にあわせ玉石を３列敷きならべた幅54cmの犬走SX7419が、基壇の東西妻まで設けられる。その前面には、直線的に幅40cmの玉石敷きの雨落溝SD7420がとおる。溝底の標高は、調査区西端で94.9ｍ前後、東端で94.8ｍ前後であり、水は西から東へ流れたものと考えられる。さらに雨落溝北側石の外側に幅66cmの玉石敷SX7421が、溝に向かってわずかな傾斜をもって巡る。西回廊SC7417の北側では、瓦溜SX7426と重複する。



第14図　基壇外周遺構検出状況(1)
１　基壇北側東半の外周（西より）　２　Ｂ期地覆石と羽目石　３　北階段地覆石の切り欠き

断面観察の結果、これらは一連の仕事であり、当初の基壇築成土および回廊内の凝灰岩片を含む黄色砂整地面を切り込んで据え付けられている。掘形埋土には、焼土あるいは炭化物を含む。また、階段地覆石は、北(外)面は直線に面を揃えているが、形状にばらつきがあり、隅に用いるような切り欠きのあるものを含む（第14図３）。さらに、地覆石の中には表面よりも裏面に著しい風化の見られるものがあり、石材の転用の様子がうかがわれる。Ｂ期は火災後の改修によるものと考えられた。

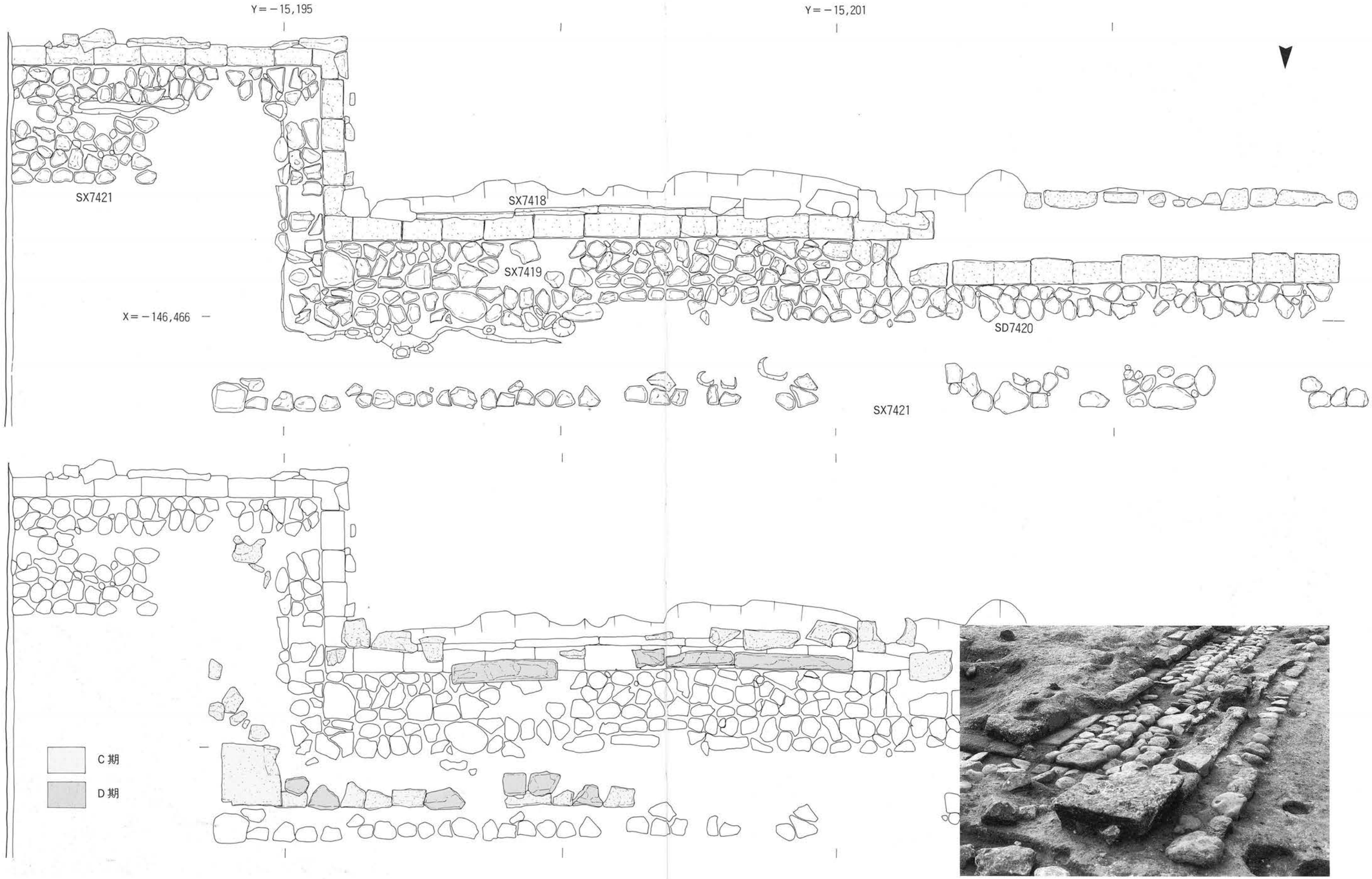
Ｃ期　Ｂ期の羽目石の上半を壊し、その上に厚さ30cm、高さ30cm前後の方柱状の凝灰岩切石を天のせのかたちでおく（第15図１・２）。また、雨落溝の側石、外周の玉石敷の一部を抜き取り、その上に凝灰岩切石をおく。雨落溝SD7420は、11世紀代の土器を含む焼土層によってすでに埋もれており、凝灰岩基壇の対面に雨落溝の葛石として凝灰岩切石をおいた可能性がある。

Ｄ期　凝灰岩地覆石との間に焼土を含む間層をはさんで、花崗岩の切石がのる(第17図１)。これは、長さ1.1～1.3m、幅20cmほどの蒲鉾形の花崗岩で、下面は平坦に調整され、曲面をなす上面は打ち欠きのまま未調整にちかいありかたを示す。羽目石として用いられていたものが、外面を下にして北側に倒れた可能性がある。また、Ｃ期に据えられた外周の凝灰岩切石の上に、大きさの不揃いな玉石を用いた石敷があらたにつくられる（第17図２）。

基壇南側は、ほぼすべての外装石材が抜取られていたが、階段東側の耳石地覆石が残存しており、凝灰岩地覆石の東南隅を切り欠き、花崗岩切石を据付けている様子が観察された（第17図３）。

Ｅ期　西側南縁では、中門および回廊基壇外周において、切石石列SX7438がつくられる(第17図４)。これらは、花崗岩基壇外装の抜き取り後に、本来の回廊基壇縁よりも南に設けられている。

第15図　基壇外周遺構検出状況(2)
1　北階段東隅　2　Ｂ期地覆・羽目石とＣ期羽目石の重複　3　回廊取り付き部・東　4　同西



第16図　基壇外周遺構（東半）変遷図（1：40、上段　B期、下段　C・D期、写真は北東より）

中門および南面回廊が、創建から今日にいたる過程で7度の火災と6度の再建を重ねたことはすでに述べた。こうした火災の痕跡は、基壇上あるいは外周において少なからず認められたが、必ずしもすべてについて成層的なありかたを示すものではなかった。これは、伽藍の中心に位置する中金堂院という建物の性格、火災後の清掃、あるいは平坦地の堆積環境等によるものと考えられる。また、火災による被害の程度などとも関わってこよう。

今回の調査では、基壇および基壇外装の複数回にわたる改修と、その重複関係を確認した。このなかにはC期とD期のように層位的な関係として把握されたものもある。遺構の状況および出土遺物から、各時期を再建の経過に照らして以下のように捉えておきたい。

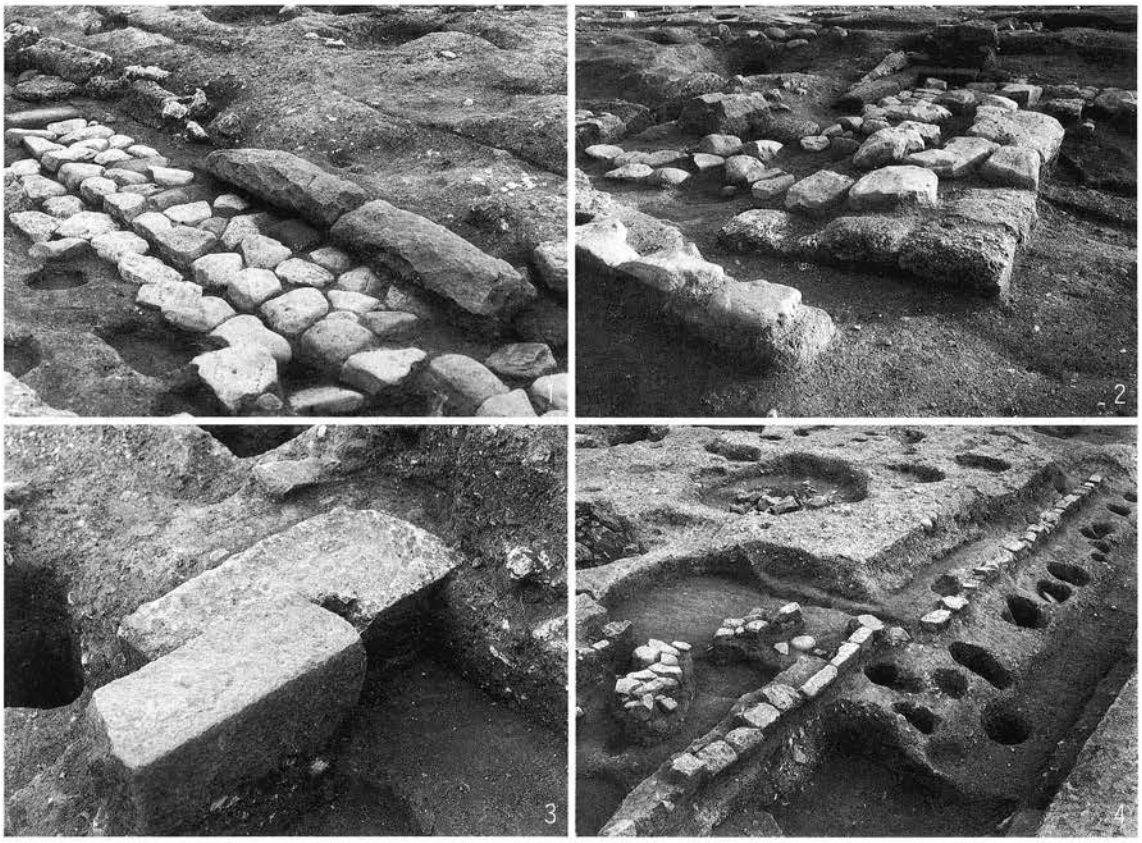
A期　現在最下層で確認できるB期遺構に改修の痕跡があることから、創建期とする。

B期　壇正積基壇の一部である地覆石・羽目石SX7418。犬走SX7419。雨落溝SD7420。玉石敷SX7421。据付け掘形に焼土を含み火災後の改修による。永承から治承の再建期。後述するように、SX7421と重複する瓦溜SX7426は創建期の瓦を含む。

C期　凝灰岩羽目石の据えなおし。雨落溝SD7420側石の抜き取りと、凝灰岩切石を玉石敷SX7421の上に据える。治承の大火後の建久の再建期。

D期　花崗岩切石をもちいた基壇外装の改修。外周の不揃いな玉石敷。基壇最上層の基壇土積みなおし。足場SS7425。応永再建期。なお、東金堂では、花崗岩による現基壇外装を応永再建時のものとする（国宝興福寺東金堂修理事務所『国宝興福寺東金堂修理工事報告書』1940）。

E期　花崗岩基壇外装をすべて抜き取ったあとに設けられていることから、享保の火災後であろう。



第17図　基壇外周遺構検出状況(3)

1　D期羽目石　2　C期切石とD期玉石の重複　3　南階段地覆石の重複　4　E期石列SX7438

(3) 回廊内の遺構

調査区北半にあたる回廊内は、表土から、黒褐色土、褐色土、茶灰色土の堆積がみられ、約40～50cmで、凝灰岩片を含む黄色砂による整地面に達する。この整地面で検出された遺構には、瓦溜、廃棄土坑、地鎮遺構、柱穴列、小穴群などがある。

瓦溜SX7426・SX7427　いずれも、西側回廊SC7417の北で検出した瓦溜である。SX7426は、北はおおむね雨落溝の西延長を限りとし、南端および東端はB期の玉石敷SX7421と重複する（第18図１）。南北1.6m、東西3.3m分を検出した。西端は調査区外へさらに広がる。創建期の軒瓦を含む。SX7427は、回廊基壇縁から約４m北に位置する。南北2.5m、東西3.0mの範囲で検出した。西端は調査区外へ続く。永承の火災以降で治承の兵火以前の軒瓦を含む。両者は、平面位置は近接するが、SX7426を埋め整地した黄色土を間層として上下関係にある。SX7426は、永承の火災にともなう瓦の廃棄、SX7427は、治承の火災にともなう瓦の廃棄遺構である可能性が高い。

廃棄土坑SK7433～7436　中門および南面回廊基壇の周囲には、瓦および基壇外装の石材などを投棄した廃棄土坑が複数認められた。SK7434は、中門基壇東北隅で検出した長さ1.8m、幅0.8m、深さ0.78mの船底形の土坑。B期の羽目石と考えられる切り欠きをもつものなど基壇外装の凝灰岩切石が出土した（第18図２）。SK7435は、西側回廊SC7417の南辺で検出した幅1.4m、深さ0.46mの土坑で、南端は調査区外に続く。埋土からは凝灰岩切石、創建期軒瓦が出土した。この土坑の北縁にE期の切石石列SX7438が重複する（第17図４）。また、南側階段の地覆石抜き取り痕跡の南辺にそって、多量の玉石を含む３基の土坑を検出した（第18図３）。

第18図　瓦溜・廃棄土坑検出状況
1　瓦溜SX7426（西より）　2　廃棄土坑SK7434　3　南階段地覆石痕跡と廃棄土坑

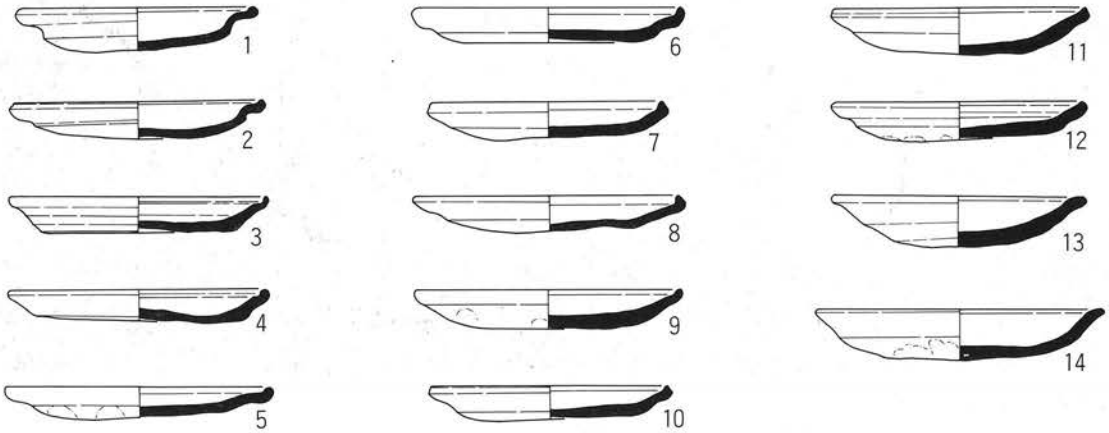
地鎮遺構SX7428　北階段北辺から北6.6m、中軸から西へ1.7mの地点において、黄色砂上の茶灰色土層から掘り込まれた径30cmの小土坑を検出した。完形の土師器小皿が21枚出土し、地鎮遺構と考えられる。小皿は3～4枚を単位として重ね合わせ、底に1枚上向きに置き、その上に下に向けて重ねたものと、穴の壁に沿って差し込まれたような状態のものとがある（第19図）。

1984年におこなわれた平安宮内裏承明門内の調査で、門の北に南北に並ぶ4基の地鎮遺構が検出され、時期を違えた遺構が直線上に並ぶことから承明門の中軸を示すものとされた。これらから西に1.3mの位置で径30cm、深さ7cm、土師器の坏・皿を埋納する類似の遺構が検出されている。時期は11世紀前葉（京都市埋蔵文化財研究所『平安京跡発掘調査概報』昭和60年度　1986）。なお承明門内においても、花崗岩破砕砂の白砂化粧土をもちいた整地が確認され、『三代実録』にみえる「布沙」との関連が指摘されている。本調査区内の黄色砂整地層のありかたを考えるうえで興味深い事例である。

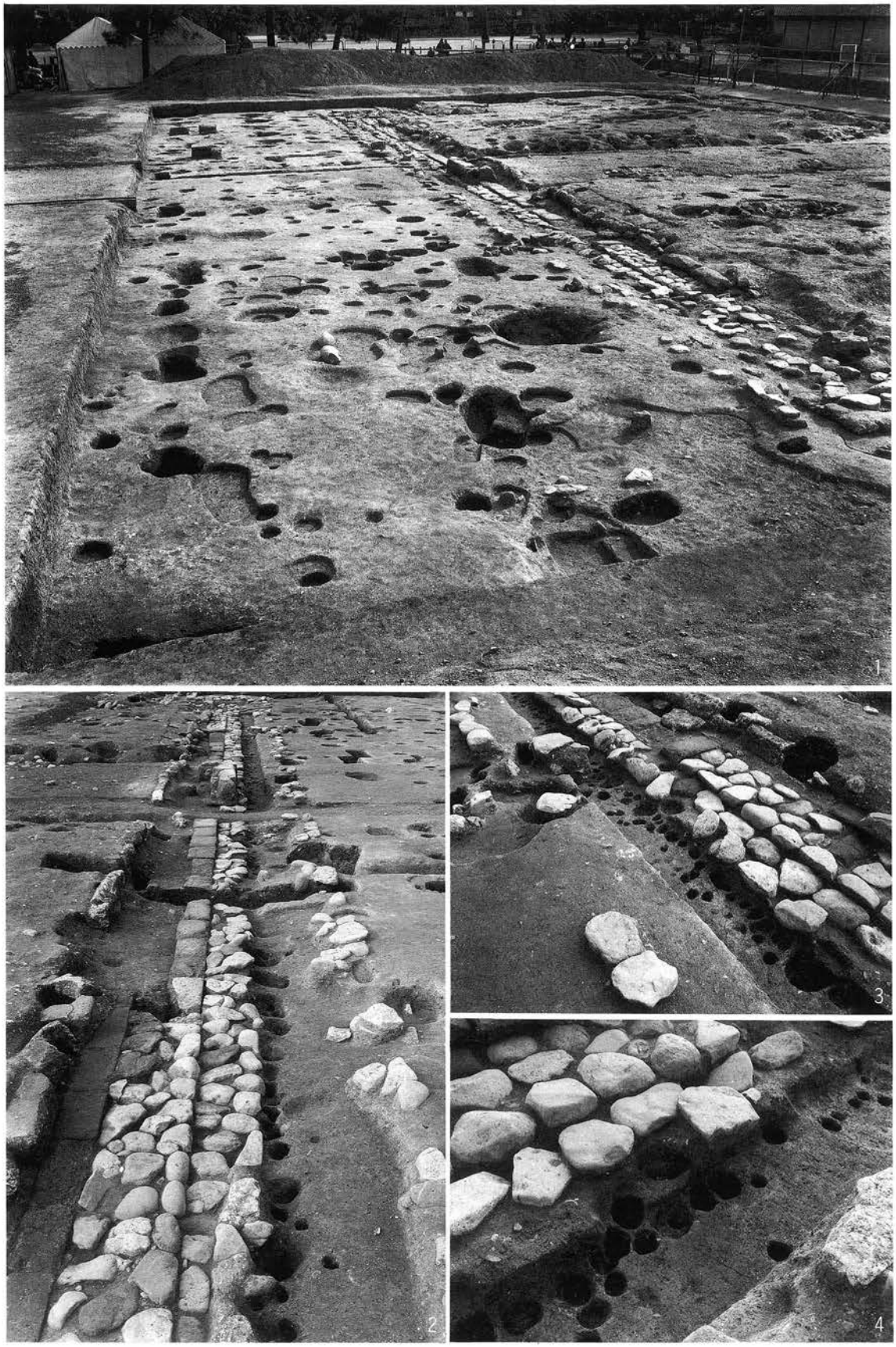
柱穴列SX7429～7431　回廊内では多数の柱穴を確認した（第20図1）。まとまりを把握できないものも多いが、中門階段正面をはさみ、その左右に並ぶ東西方向の柱穴列にSX7429～7431がある。このうちSX7430は、基壇縁から約4.6m北に位置し、ほぼ同一位置に5回の重複がある。柱間は、2.4m。柱穴内からは、10世紀から11世紀にかけての土器が出土した。

『造興福寺記』の永承3年（1048）の再建供養会の記載には、「中門内左右腋。敷式部弾正出居座。東省。西臺。」とみえ、これらが、こうした法会の際に回廊内に設けられた仮説の建物、あるいは幢竿などの柱穴である可能性もあろう。

小穴群SX7432　雨落溝SD7420北側石抜取りの位置で検出した小穴群（第20図2～4）。径10cm程のものを主体とし約260の穴を確認した。打ち込みによるものと考えられ、多くが南側（基壇側）に70度前後傾いている。北に傾くものはごく僅かである。穴の深さは30～40cmで、同一箇所に3ないし4回の重複が認められる場合もある。埋土には砂および茶灰色土が含まれる。東西の範囲は中門基壇の幅に収まる。



第19図　地鎮遺構SX7428検出状況と出土土器実測図（1：3）



第20図　回廊内の遺構

1　柱穴列SX7429～7431（西より）　2～4　小穴群SX7432